



## 観光地点検

奈良県立大学地域創造学部講師

岡本 健

### 学生にテーマ、地域を編集 「楽しさ」や工夫で事業継続

大学と地域を連携させる際に難しいのは「学生らしさ」の扱い。地域からの連携依頼で多いのが、学生に地域に来てもらい、学生らしい発想で観光振興をしてほしい、というもの。

ところが、いざ学生を交えてプロジェクトを進めていくと、「こうしなければだめ」と常識を押し付ける場合がある。逆に、何をやっても「学生らしい」と手放しで評価してしまうことも。最悪の場合、学生を無料の労働力として使うこともある。大学側が全く教育的な配慮をせずに、地域に学生を「とりあえず」送り込む例まである。これでは実の無い、名ばかりの「連携」だ。

今号では、前号に続き、奈良市で行われた観光ガイドブック制作プロジェクト「やまといろ」を取り上げ、地域と学生、観光の関係性を考えたい。

#### 「地域」の魅力を見つける

既存のガイドブックを調査した学生は、消費に関する情報の掲載が多い点に気づく。ならま

ちは特に顕著で、どのガイドブックでもカフェと土産の情報がメインなのだ。とはいえ、学生たちにとって「ならまち」のおしゃれなカフェや雑貨屋さんは魅力的であり、制作を担当した学生もそうした店を目当てにならまちに行くという。

ここで、つい「食べたり買ったりだけではなく、伝統的な文化をしっかりと紹介して…」と口出ししたくなった読者は要注意。それはあなたの立場の価値観だからだ。「説教」をすることで、このプロジェクトは「学生らしさ」を失ってしまう。ではどうするか。まずは学生たちを現場に連れて行くこと。その場合、学生たちが何かのテーマを自分で掴

んでからでなければならない。今回の場合は「ならまちで自分たちが本当に魅力的に感じることは何なのか？」だ。

#### 技術を身に着け「地域」に出る

教員が帯同し、ならまちをフィールドワークする。気になったことや面白いと思ったことを

気軽に言い合いながら巡る。写真の撮影の仕方や、インタビューの仕方などを、教員が実際にやって見せて指導していく。

実は「学生らしさ」は時に未熟さも意味する。メモの取り方を知らない、使える写真が撮影できない、礼儀がなっていない、成果物の質が低い…。こうした「学生らしさ」は放置してはいけない。感性や性格の問題ではなく、技術の問題だからだ。そこは教員が指導する。そうでな



ガイドブック「やまといろ」は3色用意した

ければ学生は自分たちの成長を実感できず、プロジェクトに参加する意義も見出せない。

学生たちは様々な技術を身に着けつつ、地域に出続けた。最初の数度は教員も帯同したが、力がついてきたと感じたら、後は学生に任せる。学生たちは自分たちが良いと感じる店に何度

も通い、店主に話を聞いた。ここでは、店主自身の生きざまや、店主や客による店や商品への想い、店舗空間の魅力といった様々な「情報」が得られる。

### 個性あるガイドブックに

そうして得られた情報を、いかに魅せるか。すでに、ガイドブック調査や質問紙調査の結果から、色を重視することや、気持ち盛り上がるような情緒的な情報を含んだガイドブックを作ることを決めている。

学生たちは、現場で見聞きして得た結果を「ココロ」「モノ」「クウカン」の3つの柱でまとめていく。出来上がったガイドブックは「やまといろ」。正方形のブックレットで「あか

いろ」「あおいろ」「きいろ」の三冊に、それぞれ伝統的な和色に合わせて8つの店舗が紹介されている。たとえば、「あおいろ」であれば「露草色」「百群色」「白藍色」などだ。学生た



やまといろ「あおいろ」の誌面

ちはさらに「ガイドブックはそれのみで完結するものではない」と考えた。読者がそこに自

分の色を加えて初めて地域に親和性を持つことを発見した。

「ココロ」「モノ」「クウカン」(3)×「あかいろ」「あおいろ」「きいろ」(3)+「あなた」(1)=「やまといろ」(10)というわけである。

出来上がったガイドブックは大学生協や観光協会などを通じて配布。取材先である店舗の中には「学生と一緒にガイドブックを作った」と感じてくれている店もあり、こちらから願ひする前に「出来上がったらうちに置かせて欲しい」と積極的に申し出てくれた。

さらに、全文を「地域創造データベース」に登録し、無料でダウンロードできるようにした。G

### 今後のポイント

こうした取り組みの課題は継続性だ。学生は卒業論文や就職活動などで忙しくなると引退する。そうした時、参加する学生メンバーは変わっても同じコンセプトで事業を継続していきたい、という発想になる。

実は、ここに落とし穴がある。「継続」そのものが目的になると、新しく入ってきた学生は、「学生らしい自由な発想」と言われるのに、これまでにやってきた方向性と異なることは実現できず、やる気を失う。あるいは、「続けること」を重視するあまり、

やる気の無い学生を単位や就職のためと言って動員する。どんどん主体性の無いものになりつまらなくなっていく。

「やまといろ」はどうか。既にガイドブックを見た数人の学生が集まってきている。

「このガイドブックは面白い」「先輩に負けられないようなものを作りたい」「私だったらこういうふうにしたい」…。やる気があり、新しい物を創造しようという学生である。

何かを始め、継続する際は、以下のプロセスを意識すると良い。まず小規模でも、しっかりとアイデアを練り、それ

を形にする。形になったものは、口コミやウェブを通じてその価値が拡散していく。すると、アンテナの鋭い人やさらなるアイデアを持った人が共感して集まってくる。この人たちに活躍の場を用意し、さらにクオリティの高い成果につなげる。これは観光・地域振興全体に応用可能な知見だ。観光は「楽しさ」や「遊び」が伴う行動だ。様々な地域で、創意工夫をし、それを発信していくことで、日本全体の魅力が高まり、楽しく過ごせる地域になる事を願ってやまない。